

## 魯迅の「無治主義」について

丸 尾 勝

### 一 はじめに

往復書簡集の両地書で、魯迅の許広平宛て1925年5月30日の書信は、「个人主义」となっている箇所があるが、その原信は「个人的无治主义」であって、書き換えられている。このことは、今日では広く知られている。この箇所とは、「其实，我的意见原也不容易了然，因为其中本有着许多矛盾，教我自己说，或者是『人道主义』與『个人的无治主义』的两种思想的消长起伏罢，所以我忽而爱人，忽而憎人；做事的时候，有时确为别人，有时却为自己玩玩，有时则竟因为希望将生命从速消磨，所以故意拼命的做。」<sup>(1)</sup>で、魯迅が許広平に自分の思想のことを吐露するくだりである。よって、このくだりは魯迅の思想を把握する資料となっている。張全之氏はこのくだりを引用して、「鲁迅将“爱”与“憎”、“为自己”和“为别人”的矛盾概括为“人道主义”和“个人的无治主义”之间的冲突，为我们研究鲁迅思想，提供了一条重要通道。」<sup>(2)</sup>と、魯迅と無政府主義との関係が開かれる通路となっていると述べる。この書き換えが知られて以来、この関係を論じる論文は全部このくだりを引用することになる。では、この「个人的无治主义」とはどういう意味であろうか。

魯迅と無政府主義の関係というこのテーマの研究があまり行われなかったことについて、張全之氏は二つの問題を挙げる。一つは学術上の問題で、「鲁迅创造性地吸收了无政府主义中的某些思想，而不是全盘接受无政府主义的理论体系，这就给研究者带来了很大的麻烦。」<sup>(3)</sup>とその複雑さを挙げ、二つ目は政治上の問題で、「从政治上来说，无政府主义是马克思主义“最凶恶的敌人”，在主流意识形态极为强硬的时代，将鲁迅与无政府主义联系起来无疑会有很大风险，这也造成了研究者对这一问题的回避。」<sup>(4)</sup>と政治と研究との関係上回避してきたと言う。偉大な文学者魯迅をマルクス主義の敵に回し、無政府主義に触れるのは憚られるということか。張全之はその論文で幾人かの論文を紹介するが、その他にもある。それらはそれぞれの基準でもって魯迅と無政府主義との関係を論じている。王富仁氏は「我认为，这就是鲁迅和阿尔志跋绥夫在观照现实、反映现实、选取题材、提炼主题和选取表现角度时最重要的

一致性特征。」<sup>(5)</sup>と、魯迅と無政府主義者のアルツィバーシェフとの各面における一致を指摘する。汪暉氏は「这些事实说明：从 1907 年对施蒂纳理论的介绍和称颂到“五四”时代对阿尔志跋绥夫的热情译介，其中的确贯穿着一条重要的思想线索，即“个人的无治主义”。」<sup>(6)</sup>と、個人的無政府主義の筋道を認めるが、「我认为鲁迅早期思想中存在“个人的无治主义”思想的影响，却否认鲁迅是“个人的无治主义者”。」<sup>(7)</sup>と、魯迅は個人的無政府主義者ではないとする。錢理群氏は「我们说，鲁迅的“个人”与“自由”观里，有着很强的无政府主义的色彩，这大概是不会错的。」<sup>(8)</sup>と魯迅は無政府主義の色合いが濃厚であるのは間違いないとする。張全之氏は「鲁迅不是施蒂纳式的“个人的无治主义”者，但“个人的无治主义”在鲁迅的思想架构中占据着重要地位，是他培育“精神界之战士”的重要思想资源。」<sup>(9)</sup>と、魯迅は無政府主義者ではないが、個人的無政府主義思想は重要な地位を占めているとする。白浩氏は「鲁迅，他“任个人排众数”的个人主义，“横眉冷对千夫指，俯首甘为孺子牛”的爱与憎，“立人”的人道主义与启蒙立场，自始至终地反对一切专制威权，都可以看出无政府主义赋予他独特的深刻性与超越性。」<sup>(10)</sup>と、魯迅を個人的無政府主義者として扱う。孟慶澍氏は「综上所述，鲁迅对“自性”、“个”等概念的理解和运用，正体现出章太炎、施蒂纳个人主义哲学的共性——以个人挑战群体，以个别反对普遍的特点。从这个意义上说，兼具老庄、佛学、尼采、叔本华背景的鲁迅，由于处在东西方个人主义的交汇点，因而早早地成为了哲学的无政府主义者。」<sup>(11)</sup>と魯迅を哲学的無政府主義者とする。このように、一定の範囲内ではあるが、様々である。様々であるのは、基準と捉えた対象が様々であるからである。そこで、無政府主義の共通した要点を設定して、それらの要点でもって、魯迅の「个人的无治主义」がどんなものかを検討していきたい。

一人の人物の思想は多層でありまた変遷もあり、激動を生き抜いた魯迅であればなおさらのことで、この一点「个人的无治主义」を主として論じていくのは問題があり、また、他の思想と混在していることもあり、張全之氏が上記で言うとおりに解明に困難な点があるが、それだけに、この一点「个人的无治主义」を主として解明していくことに徹すれば、魯迅の思想の一端が見えてくるものと思う。なおこの小論文は、魯迅の所謂前期、1926、7年頃までを取り扱う。

## 二 「无治主义」

### (1) 「无治主义」

「个人的无治主义」とはどういう意味であるのか。『中国近代的无政府主义思潮』では、「“无政府主义”一词来源于希腊语，其原意为无领导、无强权。中国近代的文献有时将其译为“无强权主义”、“无治主义”，有时又取其译音，称“安那其主义”。」

<sup>(12)</sup>とあり、「无治主义」は無政府主義を指すとする。また、1919年発行の『新中国』の『無治主義學理上的根據』の冒頭に、「我講的無治主義，就是英文的Anarchism。原來Anarchism 這個字，是從希臘文ἀν-和ἀρχη 變來的。他的意思，就是反抗官府權力，(Contrary to Outhority) 所以日本人譯做『無政府主義』。」<sup>(13)</sup>（下線は資料のママ）とあり、「無治主義」はAnarchismで、無政府主義であると述べている。そうすると、魯迅は無政府主義者なのかということになる。

### (2) 魯迅の文章の中の「无治主义」

魯迅の文章の中で「无治」や「无治主义」がどんな意味に使われているかいうことも調べておきたい。『热风』の『不懂的音译』でKropotkin（クロボトキン）のことを「这位无治主义的老英雄」<sup>(14)</sup>（下線は論者、以下同じ）と言い、クロボトキンは有名な無政府主義者であるので「无治主义」は無政府主義ということになる。

次に、1921年の『译了《工人绥惠略夫》之后』で、魯迅はアルツィバーシェフについて「一九〇五年发生革命了，他也许多时候专做他的事：无治的个人主义（Anarchistische Individualismus）的说教。」<sup>(15)</sup>と説明している。ここで、魯迅は手堅く翻訳するために、「无治的个人主义」にAnarchistische Individualismus と注をつけている。この、ドイツ語のAnarchistischeは無政府主義の意味をもっているので、「无治」は無政府となり、「无治的个人主义」は無政府的個人主義となる。

上記に依らず、アルツィバーシェフが個人的無政府主義者であることは次の点からもわかる。アルツィバーシェフはその著『作者の感想』で、「私の個人主義的思想に於て、『私は欲する！』といふ唯一の法則を持つて、自己の生活を肯定すること極めて容易であると。」<sup>(16)</sup>や「社會主義的組織を地上に打ち立てよ、一切の權利義務を平等にせよ、而も晚かれ早かれ、何人かゞ一身の無制限の自由の名に於て、無政府主義の黒い旗を掲げるであらう。」<sup>(17)</sup>と主張し、自分自身が個人的無政府主義者であることを明かしている。また、『两地书』『四』で、「要彻底地毁坏这种大势的，就容易变成“个人的无政府主义者”，如《工人绥惠略夫》里所描写的绥惠略夫就是。」<sup>(18)</sup>

とあり、「工人綏惠略夫」は「個人的無政府主義者」であり、また、その思想と行動からみても無政府主義者である。魯迅は『译了《工人綏惠略夫》之后』で、「阿尔志跋绥夫是主观的作家，所以赛宁和綏惠略夫的意见，便是他自己的意见。」<sup>(19)</sup>と、「工人綏惠略夫」の考えはアルツィバーシェフ自身と同じと述べているのであるから、アルツィバーシェフも、「工人綏惠略夫」も同じ無政府主義者となる。これらの点から、間違いなくアルツィバーシェフは無政府主義者であり、そのアルツィバーシェフを「无治的个人主义」と表しているのであるから、「无治」は無政府となり、「无治的个人主义」は無政府的個人主義となる。

さらに、「无治」ということばが三回用いられている、上述の魯迅の1921年の『译了《工人綏惠略夫》之后』この文章には材源があり、その材源を検討した上で「无治」ということばの意味を調べてみる。この文章の材源としては、中井政喜氏の指摘<sup>(20)</sup>するように、アルツィバーシェフ作『工人綏惠略夫』他五編を含む『革命物語』の、アンドレ・ビラートの『序文』（第二版1909年）<sup>(21)</sup>があり、その『序文』に収められている、アルツィバーシェフがアンドレ・ビラートに宛てた手紙文<sup>(22)</sup>があり、また、野村邦近氏が指摘<sup>(23)</sup>するように、昇曙夢の『露國現代の思潮及び文學』（1915年発行）<sup>(24)</sup>がある。昇の書物は、魯迅の日記の1917年6月30日に「晴。上午得东京堂所寄《露国现代之思潮及文学》一册。」に見える。論者はさらに、魯迅が『工人綏惠略夫』の翻訳に参考としたであろう、また、「アンドレ・キラルド」の説を引用する、中島清の日本語訳『労働者セキリオフ』の『解題』（1919年7月作）を追加する<sup>(25)</sup>。革命小説についての筆禍事件の顛末の言及<sup>(26)</sup>、現代人の二側面としてのサアニンとセキリオフの言及<sup>(27)</sup>、『幸福』の愛憎相離れず相戦う無意識の本能の渾然たる描写<sup>(28)</sup>などの点からである。材源は見落としがあるかも知れないが、これら四点とアルツィバーシェフがビラートの依頼に応じ与えた『自叙伝』<sup>(29)</sup>計五点は、一一指摘はしないが、また、量についてのみ調べてみると、アルツィバーシェフの小説の、訳文の序文、『译了《工人綏惠略夫》之后』の九割程、『《幸福》译者附记』の六割程、『《医生》译者附记』の二割程が材源を参考にしていて、照応する所や趣旨の同じ所が多く見受けられる。『译了《工人綏惠略夫》之后』と、ビラートの『《革命物語》序』の日本語訳と読み較べてみると、そのままの所も多く見受けられること、アルツィバーシェフがビラートに与えた手紙文とはきわめてよく似た箇所が何箇所かあること、また、誤植ということも考えられるが、大体は同

じで少しだけ異なる箇所が何箇所かあることは材源を参照していたことを示す。たとえば、「副編集員」が「副編集長」と、「力強い者の誰の中にも生きています」が「強い代表者の内に宿っています」と、「私の成長はトルストイに大変強く影響されました」が「私の長髪はたいへん強くトルストイの影響を受けたものである」と、「作品の形式」が「作品の外観」と少しだけ異なるのは材源を参考にしていたことを示す。五点の間の関係は、ビラートの『序文』本文、アルツィバーシェフの手紙、自叙伝の三点を昇曙夢や中島清がそれらを閲覧し参考にし、魯迅はそれら三点と昇の文章と中島の文章の計五点を参考にしている。つまり、魯迅のこれらの訳文の序文は、同意同感する所も多くあろうが、これらの五点の材源を参考にしたのであるから、その元々の材源は、アルツィバーシェフの手紙付きのビラートの『《革命物語》序』ということになる。

魯迅の『译了《工人绥惠略夫》之后』の文章の中の、一つ目の「无治」は、上述の「一九〇五年发生革命了，他也许多时候专做他的事：无治的个人主义（Anarchistische Individualismus）的说教。」<sup>(30)</sup>の箇所で、既にこの箇所については前々段と前段で述べたが、この文の材源のビラートの『序文』の箇所とはよく似ていて、その『序文』のドイツ語の原書は、魯迅の注のとおり Anarchistischen Individualismus<sup>(31)</sup>になっている。二つ目、三つ目は、「这书（『サーニン』論者注）的中心思想，自然也是无治的个人主义或可以说个人的无治主义。」<sup>(32)</sup>の「无治的个人主义」、「个人的无治主义」であり、これに対応する文がビラートの『序文』にはないので意味を検討しなければならない。アルツィバーシェフは、ビラートに宛てた手紙の中で自分の考えはシェヴィリョフと同じであると明かしている<sup>(33)</sup>が、前の段落で述べたように、魯迅はシェヴィリョフだけでなく、さらにサーニンをも追加している<sup>(34)</sup>。つまり、アルツィバーシェフ、シェヴィリョフ、サーニンは同じ無政府主義者と魯迅は見る。ビラートも「アルツィバーシェフの主張する、個人的無政府主義の世界観が。」<sup>(35)</sup>とアルツィバーシェフは個人的無政府主義者であると述べている点より、サーニンもまた個人的無政府主義者と魯迅は見て、それを「个人的无治主义」と表現したわけであるから、「无治」は無政府となる。また、魯迅が参照した、ビラートの文章中の「個人的無政府主義」の箇所は、「die des individualistischen Anarchismus」<sup>(36)</sup>で、「无治主義」に対応する語は Anarchismus であることから、「无治」は無政府、「无治的个人主义」は無政府的個人主義である。

以上により、「无治」は無政府を、「无治主义」は無政府主義を指すことになることがわかる。

### 三 無政府主義について

魯迅は無政府主義者か、ということの検討のためには、まず無政府主義とは何かという定義を定めなくてはならない。また、個人的無政府主義、無政府的個人主義というように、無政府主義と個人主義とは結合しているので、ここでは無政府主義のことについて述べ、次章で個人主義のことについて述べる。

無政府主義とはなにか、という定義の確定のため、『无政府主义在中国』より借用する。この資料は西洋の無政府主義だけでなく、中国の無政府主義についても具体的に、また、総括的に言及している。この書によれば、無政府主義の共通点として、「标榜虽各不同，但反对一切权力和权威，鼓吹个人绝对自由，幻想建立无政府社会的基本主张则是一致的。」<sup>(37)</sup>と、「反権力・反権威」、「個人の絶対的自由の主張」、「無政府社会の実現」の三つの点をあげる。無政府主義について『日本思想史辞典』では、「一般に無政府主義（アナーキズム）とは、国家をはじめとするすべての政治権力を否定し、個人の完全なる自由とそうした個人の自主的な結合による社会の実現をめざす思想である。」<sup>(38)</sup>とあり、『広辞苑』でも、『大辞林』でも、三点の共通点とほぼ一致している。ただ、「無政府社会の実現」は、『日本思想史辞典』や『大辞林』のように、内容を含んだ部分を追加して「個人の自主的な結合による無政府社会の実現」としたい。これら三点は無政府主義の成立の要点で、相互に深く関連している。

なお、無政府主義の三点の共通点は、中国の在日無政府主義者の劉師培・何震の『天義』の『论种族革命与无政府革命之得失』<sup>(39)</sup>でも、在仏無政府主義グループの『新世紀之革命』<sup>(40)</sup>でも、劉師復の『《晦鳴録》創刊宣言』<sup>(41)</sup>でも確認できる。

### 四 魯迅の個人主義

#### （１）魯迅の個人主義

魯迅の個人主義については魯迅の文章の中に書かれている。

『墳』の『文化偏至論』において、先に個人の尊重について述べ、個人主義はまず「害人利己之义」<sup>(42)</sup>という意味ではないと断り、フランス革命以降の個人主義の

歴史を説き、シュティルナー、ショーペンハウアー、キルケゴール、イプセンやニーチェの登場を説明する。魯迅も「与其抑英哲以就凡庸，曷若置众人而希英哲？则多数之说，繆不中经，个性之尊，所当张大，盖揆之是非利害，已不待繁言深虑而可知矣。」<sup>(43)</sup>と、誤りに満ち、英雄賢者を放逐する群集よりも、個性の尊厳の開発に導く英雄賢者に期待すべきだとし、これらの先覚者に賛同する。

次に魯迅は、十九世紀において物質文明への崇拜が度を越しその傾向が偏至に走り、精神は廃れ顧みられず、一切の虚偽と罪惡が発生してきたと説き、物質文明に反対し、精神を尊重することを主張する。

この二点を合わせて魯迅の今後の指針をまとめると、「诚若为今立计，所当稽求既往，相度方来，培物质而张灵明，任个人而排众数。人既发扬踔厉矣，则邦国亦以兴起。」<sup>(44)</sup>と物質と多数を排除し、精神と個人を尊重することを主張し、「是故将生存两间，角逐列国是务，其首在立人，人立而后凡事举；若其道术，乃必尊个性而张精神。」<sup>(45)</sup>となり、個性を尊重し精神を発揚して人間を確立すること（「立人」）が大切であると説く。つまり、魯迅の個人主義とは、他の多数に依拠せず、物質文明に溺れず、個性を発揮して自我の確立を図ることによって「立人」し、その実現のために、極端な個人主義者の先覚者の力に委託して「人国」を目指すことである。汪暉氏は「個人」について、「其一，强调每一个个体的独特性，……其二，强调优秀人物的“独异”、“自大”，呼唤“精神界之战士”」<sup>(46)</sup>と指摘したように、個人には、自我を確立する一般の個人と、その個人の自我を確立させる極端な個人の先覚者という二重の意味があり、よって、個人主義も、個人が自我を確立するという意味と、その個人の自我を極端な個人の先覚者が確立させるという二重の意味がある。

上記の『文化偏至論』は1907年の作であるが、他の時期にも、魯迅の思想が直接表現される雑感文の中に個人主義の考え方はよく現れる。一部例を挙げると、1923年の『娜拉走后怎样』の講演では、「中国太难改变了，即使搬动一张桌子，改装一个火炉，几乎也要血；而且即使有了血，也未必一定能搬动，能改装。不是很大的鞭子打在背上，中国自己是不肯动弹的。」<sup>(47)</sup>と変革の困難さを嘆く。1925年の『灯下漫笔』では「于是大小无数的人肉的筵宴，即从有文明以来一直排到现在，人们就在这会场中吃人，被吃，以凶人的愚妄的欢呼，将悲惨的弱者的呼号遮掩，更不消说女人和小儿。」<sup>(48)</sup>と、中国社会を人肉の宴席とたとえるまでに至る。そして、1927年の『答有恒先生』では「我曾经说过：中国历来是排着吃人的筵宴，有吃

的、有被吃的。被吃的也曾吃人，正吃的也会被吃。但我现在发见了，我自己也帮助着排筵宴。」<sup>(49)</sup>と魯迅自身も人肉の宴席の手伝いをしていたと認める。これらの叙述は、魯迅の個人主義が絶望的な状態に陥っている嘆きのことばであって、ということとは個人主義の追求が行われていたということになる。

魯迅の個人主義の追及は、雑感文だけでなく、小説、詩にも現れている。『呐喊』『彷徨』の多くの作品は、旧社会を背景にして地方都市や農村を舞台にして、覚醒しない民衆に対置する先覚者の姿が写實的に描かれている。『狂人日記』の狂人、『长明灯』の狂人（四爺の息子）、『野草』の『复仇』の「二人」、『复仇（二）』の「神の子」、『在酒楼上』の呂緯甫や『孤独者』の魏連受などは、民衆や支配者によって次第に追い詰められる。民衆や支配者に対置される、このような一連の先覚者の表現に魯迅の個人主義の結果はよく現れている。特に、「个人的无治主义」と許広平宛書信に自分の思想を吐露した時が1925年5月30日で、その後、10月17日に書かれた『孤独者』の魏連受が敗北、転向していくことは、魯迅の個人主義の結末を示している。

## （2）シュティルナーと比較して

ここでは、無政府主義の父、哲学的無政府主義者と言われるマックス・シュティルナーと魯迅とを比較しながら、前節四（1）で述べた魯迅の個人主義などの思想が無政府主義に該当するのかどうかを検討したい。

魯迅は『文化偏至論』において、マックス・シュティルナーを紹介し、賞賛する。「物反于极，则先觉善斗之士出矣：德人斯契纳尔（M. Stirner）乃先以极端之个人主义现于世。谓真之进步，在于己之足下。人必发挥自性，而脱观念世界之执持。惟此自性，即造物主。惟有此我，本属自由；既本有矣，而更外求也，是曰矛盾。自由之得以力，而力即在乎个人，亦即资财，亦即权力。故苟有外力来被，则无间出于寡人，或出于众庶，皆专制也。国家谓吾当与国民合其意志，亦一专制也。」<sup>(50)</sup>と先覚者、極端な個人主義者として紹介し、さらに「意盖谓凡一个人，其思想行为，必以己为中枢，亦以己为终极：即立我性为绝对之自由者也。」<sup>(51)</sup>と要約する。この紹介、要約には、無政府主義の一つ目、二つ目の共通点である反専制・反国家即ち「反権力」、「絶対的自由の追求」が述べられている。また、シュティルナーの著『唯一者とその所有』の『僕の交り』などで、また、下記のシュティルナーとの五番目の異なる点で



触れるように、「唯一者」と「唯一者」との結合について述べ、三つ目の共通点「個人の自主的な結合」について言及している。三つの共通点が言及されているので、シュティルナーは無政府主義と言える。なお、銭理群氏は、魯迅がシュティルナーに賛同したとあって、上記の、魯迅のシュティルナーの紹介文<sup>(52)</sup>とその要約文<sup>(53)</sup>であるにも関わらず、あたかもそれを魯迅の言説と取り、「他说：“国家谓吾当为国家合其意志，亦一专制也。众意表现为法律，吾即当受其束缚，虽曰为我之輿台，顾同是輿台耳。去之奈何？曰：在绝义务。义务废绝，而法律与偕亡矣”。这里的无政府主义的倾向是十分明显的。我们说，鲁迅的“个人”与“自由”观里，有着很强的无政府主义的色彩，这大概是不会错的」<sup>(54)</sup>と、このような論拠でもって魯迅は無政府主義が濃厚であることは間違いないとするのはいかがなものか。また、孟慶澍氏は、銭理群氏が指摘した箇所をそのまま採用して、魯迅と無政府主義との内的関係を説明する論文の一つとしている<sup>(55)</sup>。

シュティルナーと魯迅には共通点もあり、また異なる点も多く、この共通点や異なる点について述べる。

なにゆえに魯迅は数多くの思想家の中よりシュティルナーを選択したのか、この点を明らかにするためにもシュティルナーと魯迅との共通点をまず取り出してみる。

第一に、両者ともに個人主義者であり、個人の覚醒による、個人の自我の確立を説き、それは誰でも可能であると薦め、個人への支配に反対するというように個人を中心とする。シュティルナーにおいては上記の紹介、要約からわかることであるが、魯迅も、四（1）「魯迅の個人主義」の箇所で述べたように、個性を発揮し自我の確立を図り、そのために極端な個人の先覚者に力を借り、個人への支配に強く反対し、個人を中心に据えている。

二番目は、シュティルナーは「人必发挥自性，而脱观念世界之执持。惟此自性，即造物主」<sup>(56)</sup>というように、個人の自我の覚醒により人の確立を目指す。魯迅も個人の自我の覚醒により人の確立を目指し、「立人」を図る。この、人の確立という点で両者は共通する。魯迅は先に「人国」のため「立人」を図り、「立国」は後にするが、普通の革命は、専制者、専制政府を打倒する「立国」を先にして、「立人」「人国」を後にする。魯迅は人の確立、「立人」を重要視する、この点が魯迅の一つ目の特徴である。

三番目は、両者とも強者を提示する。シュティルナーは最高強者の「唯一者」を

提示し賞賛し、魯迅も「先覚者」を提示し賞賛する。「先覚者」は「明哲の士、超人、英雄哲人、英雄賢者、精神界の戦士、精神界の偉人」などとも呼ばれ、孤軍奮闘しても意志を曲げない強者である。普通であれば、自分が主義主張を展開し変革を担うところであるが、先覚者に委託する点この点が魯迅の二つ目の特徴である。ただ、後で説明するが、シュティルナーの「唯一者」と魯迅の「先覚者」とでは質が異なる。

四番目は、両者ともに精神を尊重する。シュティルナーは、「精神」ということばに対して独特の意味づけをし、これは人間が作った、作られたものであつて否定されるべきものとして扱う。が、シュティルナーはヘーゲル左派で、純粹に思索を凝らし、純粹に論理を運び、創造者の虚無にまでに到達するように、思策、精神作用を重視する。魯迅は、物質よりも精神を重んずることは三（１）で述べている。精神尊重は魯迅の三つ目の特徴である。

これらの共通点で魯迅とシュティルナーは一致しているので、魯迅は多くの思想家の中よりシュティルナーを選択して自分の中に取り込んだのである。

これらの点で確かに両者の共通点があり、両者は同じように見えるが、シュティルナーの世界は、以下の諸点のように魯迅の世界とは異なる。

まず「自由」であるが、シュティルナーは一切からとらわれないことを「自由」とするが、「自由」の追求の果ては「自由」にこだわる自分自身を否定し、「君は常に『自由人』であるばかりでなく、『所有人』でもあらねばならぬ。」<sup>(57)</sup>と、「所有人」、「唯一者」を目指す。魯迅の場合は、中国国民を支配する清朝や封建制度・封建的因習からの解放であり、一切からの自由ではなく、現実的で限定的である。『文化偏至論』、『摩羅詩力説』と『破惡声論』には、先覚者の思想、文学やその歴史の紹介には「自由」ということばは多く見られるが、それら以外の魯迅の主張の文章には「自由」ということばは見られない。たとえば『破惡声論』の「众昌言自由，而自由之焦萃孤虚实莫甚焉。」<sup>(58)</sup>は、これは多数の人の主張する「自由」で、魯迅の主張ではない。つまり、資本主義制度下とは違い、封建制度下での支配が堅固で、何ものにもとらわれないという「自由」という所までは求められない。魯迅は『狂人日記』で中国社会の仕組みを人が人を食うと分析し、『阿Q正傳』で奴隸根性の根強さや常に芝居の観客でいる愚かさも提示した。このように、中国社会は、四（１）でも述べたことでもあるが、魯迅自身もその宴席を手伝った、人肉の宴席の場である。

こうした現状の中で、個人の解放の主張という点では、無政府主義の二つ目の共通点、「個人の絶対的自由の主張」の「個人の自由の主張」という点は該当する。「自由」とは人や団体により異なり幅があるが、その人、団体が真に自由と思うことが「自由」で、魯迅にとっての「自由」とは、中国国民を支配する清朝や封建制度・封建的因習からの真の解放で、人が人らしく生きていくことができる「人国」を目指すことであり、シュティルナーのような、一切からの「自由」「絶対的自由」とは異なり、限定的である。また、後に述べる、異なる点の四番目の国家に対する姿勢で、魯迅は「国家を否定はしない」である以上、国家は最大の支配構造であるから「絶対的自由」ということは考えられない。よって、「絶対的自由」とは言えないわけであるから、無政府主義の二つ目の共通点は該当しないということになる。

第二に、前で述べた第一のことに関わるが、両者が目指す所や目指し方が違う。シュティルナーは個人的に、何ものにもとらわれない「唯一者」を思惟の世界の中で目指すが、魯迅は、自分ではなく、民衆がこの世に現実のこととして「立人」を図り、人らしい人の国「人国」の現実的建設を目指す点で異なる。

第三に、シュティルナーは、「僕の力は僕の所有である。僕の力は僕に所有を與える。僕の力は僕自身である、そしてそれによつて僕は僕の所有となるのである。」<sup>(59)</sup>と述べ、「力」と「所有」という概念を導入すれば、誰でも「唯一者」になれると言うが、「力」のない弱者は實際上この概念を導入できず「唯一者」にはなれない。また、「唯一者」が「唯一者」になった後はすべてを「材料」と見下す姿勢を取る。その姿勢とは魯迅は大きく異なる。魯迅は常に弱者、被圧迫者、悲劇に陥るものの味方である。魯迅の小説では数多くの悲劇的な人物を中心に据え、悲劇を訴える。また、魯迅が翻訳する文学者には被圧迫民族の作家が多い。ペティーヒヤ『現代小説訳叢第一集』のチリコフ、ヴァゾフ、ミンナ・カントは民族解放闘争に賛同し参加しているし、ヴァゾフ、ミンナ・カントの作品は『小説月報』の『被圧迫民族の文学特集』に発表されている。魯迅は『“医生”译者附记』において、「不知道能否在平定什么方略等等之外，寻出一篇这样为弱民族主张正义的文章来。」<sup>(60)</sup>と、中国には弱小民族のために正義を主張した文章はないとまで言い切っている。

第四に、国家等に対する姿勢であるが、シュティルナーは「國家は常にたゞ、個

人を制限し、抑制し、従属せしめ、何らかの一般者に服従せしめる、といふ目的を持つものである。」<sup>(61)</sup>と、彼のその論理的帰結として「唯一者」に対立する国家を強く否定する。が、魯迅は否定はしない。「立人」して「人国」を築く「立国」は国家の存在を否定しては成立しない。また、『文化偏至論』では、「民不堪命矣，于兴国究何与焉。」<sup>(62)</sup>、「人既发扬踔厉矣，则邦国亦以兴起。」<sup>(63)</sup>、『摩罗诗力说』でも、「使知黄金黑铁，断不足以兴国家」<sup>(64)</sup>、その他、国家ということばを普通どおりに使用している。国家の存在を否定するならば、大きなことであるので否定の言辞はあるはずであるが、見当たらない。国家の存在を否定しないことは、無政府主義の三つ目の共通点、「個人の自主的な結合による無政府社会の実現」の「無政府社会の実現」の否定を意味する。

また、魯迅は「国家は否定はしない」は、上記の、スティルナーと異なる点の第一、第四の箇所ですべて述べたことで、国家そのものの存在を否定はしない意味であるから、魯迅は「反国家」とは言えない。国家は最大の権力構造であるので、「反権力」とも言えない。他に、国家権力維持の重要な役割を果たす、法律、議会、軍隊や警察などの否定の言辞は、軍隊だけで国家は興せないという点で軍隊を否定することはあったが、見当たらず、「反権力」とは言えない。よって、無政府主義の一つ目の共通点の「反権力」は、該当はしない。国家を支え、大同を妨害する民族主義に対して無政府主義者は強く反対するが、魯迅の姿勢は異なる。劉師培・何震の『天義』の『論种族革命与无政府革命之得失』では民族主義に、學術の誤謬、心術の陋劣、政策の偏狭を理由に強く反対する<sup>(65)</sup>。魯迅は民族主義、民俗的なものに対して一概に反対はしない。民俗の迷信に対して、『破惡声論』で、「虽中国志士谓之迷，而吾则谓此乃向上之民，欲离是有限相对之现世，以趣无限绝对之至上者也。」<sup>(66)</sup>と、迷信は素朴な民衆の生きていく力となるとして理解を示す。が、随感録の『三十三』で、「据我看来，要救治这“几至国亡种灭”的中国，那种“孔圣人张天师传言由山东来”的方法，是全不对症的，只有这鬼话的对头的科学！——不是皮毛的真正科学！——这是什么缘故呢？」<sup>(67)</sup>と、偽知識人が迷信を持ち出して恨む科学を攻撃するのは的外れと批判し、迷信を非難する。この態度の違いは、どういう人物が迷信を持ち出し、迷信にどう対するかによって異なってくる。魯迅は『破惡声論』ではさらに寺院の破壊、村祭りの中止、神話の嘲笑、古来よりの竜への疑問への批判を展開して

いる。魯迅自身も拓本収集家で、また、作品の中で芝居や神話、民間信仰などに興味関心を示している。魯迅は、民族主義や民俗の事物に対しては人物やその姿勢によとし、無政府主義者のように一律に反対の姿勢はとらないが、偽知識人や体制維持者の、その虚偽、私利私欲、個人への抑圧・支配、進化・改革への抑圧に対しては、魯迅は「反権威」でもって激しく反発する。

第五に、シュティルナーは、「最後の最も斷乎たる對立、唯一者對唯一者のそれは、根本において對立と呼ばれるものを超越してゐる。而もそれは『一致』や統一に逆戻りすることはない。」<sup>(68)</sup>と、「唯一者」と「唯一者」との結合は最も望ましいものと述べる。魯迅の場合であるが、「人既发扬踔厉矣，則邦国亦以兴起。」<sup>(69)</sup>、「人国既建，乃始雄历无前，屹然独见于天下，更何有于肤浅凡庸之事物哉？」<sup>(70)</sup>のように、「立人」から「人国」の「立国」への過程の中で、人と人との結合について特に述べていないし、他の箇所でも見当たらない。汪暉氏はその論文の中で、「魯迅把“个性张”视为通达“人国”的途径，说明“人国”的建立并不是政治革命的结果，也不是一种国家形式或政治制度的建立，而是一种伴随所有人的自由解放而自然产生的联合体，即“人+人+人+等等”这一种无政府状态的空想社会。」<sup>(71)</sup>と述べるが、この中の「人+人+人+等等」は行き過ぎた敷衍ではないだろうか。ここは、プレハーノフの『無政府主義と社会主義』の「自我+自我+自我+等等 (ich+ich+ich+etc.)、——茲に彼の社會的理想郷がある。」<sup>(72)</sup>の言い方を利用して「人+人+人+等等」と表現している。もちろん記述がなくても論理的に敷衍することはあるが、「人」はよいにしても、「+」の結合を付けて「人+人+人+等等」と敷衍するのは行き過ぎではないか。「人+人+人+等等」は特に見当たらないし、また、異なる点の第四で述べたが、魯迅は国家の存在は否定はしていないので、国家から離脱した「人+人+人+等等」はありえないということになり、また、同じ箇所ですべたように、国家の存在の否定がないことは「無政府社会の実現」の否定となり、無政府主義の共通点の三番目の「個人の自主的な結合による無政府社会の実現」は該当しないことになる。

第六であるが、既にわかるように、着眼や考え方はシュティルナーは現実超越であるのに、魯迅は現実重視である。現実超越は、現実を見据えながらも、結局世の中とはかけ離れて個人的に、論理的に思索をめぐらし、哲学的、思索的、抽象的になるということである。魯迅は現実を直視し現実を重視し現実に戻帰する。異なる点の一番目で述べたように、中国民族の危機に震え、中国の実情を人肉の饗宴とし、

民衆は永遠に芝居の観客でいることに魯迅は悲嘆に暮れる。現実の対極にあるものは夢であり、「黄金世界」である。魯迅が、「他说，“你们将黄金世界预约给他们的子孙了，可是有什么给他们自己呢？”……所以我想，假使寻不出路，我们所要的就是梦；但不要将来的梦，只要目前的梦。」<sup>(73)</sup>と若い学生の前で講演し、目の前の夢しか見えてはならないと、現実重視を訴える。

このように、シュティルナーと魯迅とでは共通点もあるが、異なる点も多い。

以上を、魯迅の思想が無政府主義の共通点に該当するかについてまとめる。無政府主義の共通点の一つ目の「反権力・反権威」は、国家そのものの存在を否定はしないのであるから、魯迅は「反国家」とは言えず、即ち、国家は最大の権力機構であるので「反権力」とは言えない。ただし、偽知識人や体制維持者の、その虚偽、私利私欲、人への抑圧、改革への妨害に対しては反発する「反権威」は該当する。二番目の共通点の、「個人の絶対的自由の主張」の「個人の自由の主張」については「自由」を限定的に解釈した場合該当するが、何ものにもとらわれない「絶対的自由」とは言えないので、共通点の二番目としては該当しない。三番目については、「人+人+人+等等」は特に言及はないし、魯迅は国家の存在は否定していないので、国家から離脱した「人+人+人+等等」はありえず、共通点の三番目の「個人の自主的な結合による無政府社会の実現」は該当しない。

結局無政府主義の三つの共通点について該当しないことになり、これにより魯迅は無政府主義者とは言えない。無政府主義を成立させる三つの共通点で欠落している点は、まず国家の存在の否定で、即ち無政府が主張されない以上とても無政府主義とは言えない。さらに、絶対的自由や無政府・無国家下の自由連合も欠落している。シュティルナーとの異なる点の三番目の、弱者の中国民族を救うべく、四番目で述べたように、民族の根本を尊重し、六番目の現実に立脚する姿勢や、一番目の、「立人」し、二番目の「人国」を目指す目標が根本的にシュティルナーとは違っている。これは、つまり、滅亡の危機にある民族をどう救うかという問題意識の有無の違いであると思われる。

ところで、魯迅は無政府主義の共通点の三つとも該当しないが、魯迅の個人主義にはシュティルナーとの四つの共通点があり、また、その異なる点の一つ目で「反権威」、二つ目の所で「個人の自由の主張」は言えると述べた。絶対的自由の追求やそれに伴う反国家が違うとは言え、それらを除けば魯迅はシュティルナーとは同じで、

近いとは言え、即ち無政府主義とは近いとは言える。それゆえに、次の（3）で述べるが、魯迅の無政府主義者との交際や無政府主義への接近が図られる。また、接近しているがゆえに、無政府主義への注視があり、批判もおきる。この点も次の四（3）で述べる。

さて、シュティルナーとの共通点の二番目で述べたことであるが、魯迅の一つ目の特徴であった所の「立人」から「人国」へ向かう「立国」という過程は、専制者や専制政府を打倒して「立国」を先にする普通の政治革命とは逆で、魯迅は「人立而后凡事举」<sup>(74)</sup>、「人国既建，乃始雄历无前，屹然独见于天下，更何有于肤浅凡庸之事物哉？」<sup>(75)</sup>と、「立人」を図れば諸事うまくいくと言うが、どのように「立人」を為し、どのように「立国」を図り、どのように「人国」を築くかという明確な内容の方針がない。政治思想としては欠陥である。

また、魯迅は当初はそうでもなかったが、「我并无喷泉一般的思想，伟大华美的文章，既没有主义要宣传，也不想发起一种什么运动。」<sup>(76)</sup>と、思想家でもなく、文章家でもなく、誇る主義もなく、運動を起こそうとも思わないと自覚するようになったことも、政治思想がこのように体系的でなく、行動も伴わなくなった理由であろう。

しかし、魯迅の個人主義は、その政治思想に欠陥があったとしても、その当時は意識していなくても、無政府主義に賛同していなくても、後から考えれば、「立人」が先で「立国」のことを考えない個人主義は、「立人」が先に成れば「立国」は必要がなく考える必要がない無政府主義と過程として同じになり、無政府主義者の道と同じになる。「立人」して自由を獲得することが先か、「立国」して政権を奪取することが先かは、いわゆるアナボル論争となるが、魯迅の、一つ目の特徴である「立人」思想は前者の道と同じになる。また、魯迅の個人主義の実現の方法も、魯迅の思想の二つ目の特徴である、「先覚者」の個人に委託するという個人主義であり、いっどんな先覚者が登場するのかもわからない。また、三つ目の特徴の精神尊重は即ち唯心的であり、客観情勢、組織力、戦術、戦略などを無視したものであり、到底うまくはいかない。四（1）で魯迅の個人主義の現れとして、雑感文や小説・詩を挙げたが、それらの一連の結果は、人肉の宴席の社会の中で、救われるべき民衆が先覚者を追い詰め、その滅亡を願うに至り、特に1925年10月17日に書かれた『孤独者』の魏連殳は追い詰められて敗北、転向していくことになり、魯迅の個人主義の結末を示している。このような展望のない状況の中で自分の個人主義の思

想を振り返った時、国家のあり方の「立国」のことは考えず、まず「立人」のことばかりを追求してきたことは無政府的主義の道と同じであり、また、上述したように無政府主義とは多くの点で近い思想であり、また、客観的な情勢等を見せず、出現しないかも知れぬ先覚者に空しく委託し、結末は絶望的である主観的な個人主義であると知らしめられ、自分の思想をそのような個人主義と無政府主義とが合わさった「個人的无治主义」と表現して、1925年の5月30日に魯迅が許広平宛書信に吐露したものと思われる。

### （3）無政府主義者との関係

上記の（2）で述べたように、魯迅は東京留学時代から無政府主義への関心を示し、無政府主義者との交際があり、無政府主義的傾向の強い作家たちの紹介・翻訳をしている。具体的には次のようなことが挙げられる。無政府個人主義のシュティルナー、それを引き継いだニーチェ、ナロードニキの傾向があるトルストイの影響を受けたこと、留学時代『民報』などの発行物による、当時流行した無政府主義の影響、師の章太炎の影響、弟・周作人に虚無主義に関する翻訳を依頼したこと、日本の社会主義者、宮崎滔天の所に出入りしたこと、無政府主義傾向の強いアルツィバーシェフ、アンドレーエフの紹介・翻訳、無政府主義者のクロポトキンの影響を受けた有島武郎や魯迅が共感を示した「新しき村」を興した武者小路実篤の紹介・翻訳、無政府主義者のエロシェンコの世話やその紹介・翻訳、アナルコサンジカリストのファン・エーデンの『小さなヨハネス』などの翻訳、無政府主義者のバローハの翻訳、無政府主義者の陳声樹、陳空三、馮省三等との往来、これらの提起した世界語学校の理事の担当などである。これらのことは、魯迅と無政府主義の関係が強い傍証として挙げられる。

ところが、魯迅は無政府主義を批判する。これまでよく取り上げてきた『文化偏至論』の中で、「嗟夫、彼持无政府主义者，其颠覆满盈，铲除阶级，亦已至矣，而建说创业诸雄，大都以导师自命。夫一导众从，智愚之别即在斯。与其抑英哲以就凡庸，曷若置众人而希英哲？」<sup>(77)</sup>と無政府主義者を批判する。無政府主義者の「労働者シェヴィリョフ」に対して「中国这样破坏一切的人还不见有，大约也不会有的，我也并不希望其有。」<sup>(78)</sup>と危険な人物の出現を望まないと言う。それから、パリ派の無政府主義者吳稚暉に対して「吴稚暉先生不也有一种主义的么？……而他的主义却须数



百年之后或者才行，由此观之，近于废话故也。」<sup>(79)</sup>と数百年先の実現とはたわごとと批判する。

一方で無政府主義者に接近し、一方で無政府主義者を批判する事情について魯迅は許広平に次のように説明している。『两地书』で「在中国活动的现有两种“主义者”，外表都很新的，但我研究他们的精神，还是旧货，所以我现在无所属，但希望他们自己觉悟，自动的改良而已。例如世界主义者而同志自己先打架，无政府主义者的报馆而用护兵守门，真不知是怎么一回事。」<sup>(80)</sup>と、自ら自覚し改良することを希望しながら、中身の古い無政府主義者たちを批判し、自らはどこにも属しないと述べる。魯迅は無政府主義の思想には親近感を持ちながらも、その思想家の精神に注目し、旧物であると批判する。魯迅は何よりも虚偽、ごまかしや私利私欲を嫌う。

### 五「立人」の思想

魯迅は、無政府主義者とは言えず、また、その個人主義は政治思想としては欠陥があるが、その思想の一つの特徴である「立人」には鋭い洞察と先見の明が伺われる。「将生存两间，角逐列国是务，其首在立人，人立而后凡事举。」<sup>(81)</sup>と、鍵は人の確立、「立人」にあると言う。当時の西洋の資本主義社会の弊害を横目で見て、それらの老朽を偏至として排除して、物質崇拜主義、多数尊重主義に反対し、中国の根本的解決を目指して、個人尊重、個性発揮、自我確立の「立人」を図り、「人国」を目指す。「立人」を図り、「人国」を目指すこの道は、問題の根本を捉えていて、それが故に急進的で、急進的であるが故に、実現困難であるが、普遍性を備えている。

「立人」の思想は、シュティルナーもそうであるが、流行に乗らず、それこそ個人として自我を発揮して、弊害のある西洋の資本主義を突き抜けて、中国社会の根本的解決を目指し、変革の本質に鋭く迫った思想である。

銭理群氏は1997年に北京大学で若い聴衆を前にして、この百年を総括して、魯迅が提示した「別立新宗」<sup>(82)</sup>の思想家は登場したかと問い、「我们固然需要建设一个科学的、民主的、富强的、独立的现代民族国家，但同时必须保证每一个具体的个体的生命的精神自由；如果不是这样，而是以对个体精神自由的剥夺与压抑来换取国家的独立、统一、富强与民主，那么，就不可能有真正意义上的现代国家（“人国”）——人依然没有摆脱被奴役的状态，不过是以新的奴役形式代替了旧的奴役形式，也就是没有从根本上走出原始的“奴隶时代”。」<sup>(83)</sup>と、魯迅の言う「人国」に現代でも

到達していないどころか、新しい奴隷状態ではないかと訴える。そうすると、魯迅が言ったような、新しい主義を樹立する先覚者が登場して「人国」を築くということはまだ成ってはいないのであろうか。

注

- (1) 『两地书真迹』90 頁、上海古籍出版社 1996 年。
- (2) (9) 張全之『从施蒂纳到阿尔志跋绥夫』19, 23 頁、『魯迅研究月刊』2007 (11) 北京魯迅博物館。
- (3) (4) 張全之『魯迅与无政府主义关系的研究述评与反思』86, 86 頁、西南民族大学学报 (人文社科版) 2006/7 総第 179 期。
- (5) 王富仁『魯迅前期小说与俄罗斯文学』150 頁、陝西人民出版社 1983 年。
- (6) (7) (71) 汪暉『施蒂纳与魯迅前期思想』191, 210, 209 頁、『魯迅研究 12 辑』上海文芸出版社 1988 年。
- (8) (54) 錢理群『与魯迅相遇』79, 79 頁、三聯書店 2003 年。
- (10) 白浩『魯迅与无政府主义』82 頁、『魯迅研究月刊』2004 年第 12 期 北京魯迅博物館。
- (11) (55) 孟慶澍『无政府主义与五四新文化』260 頁, 237 頁注①、河南大学出版社 2006 年。
- (12) 蔣俊・李興芝『中国近代的无政府主义思潮』1 頁。同じような記述が孟慶澍『无政府主义与五四新文化』『绪论』(河南大学出版社 2006 年) の 2 頁にも見られる。
- (13) 高一涵『無治主義學理上的根據』27 頁、『新中国』第一卷第三號 1919 年。
- (14) 『魯迅全集第一卷』(以降すべて 1981 年版を参照)『不懂的音译』397 頁。
- (15) (19) (30) (32) (34) 『魯迅全集第十卷』『译了《工人绥惠略夫》之后』166, 168, 166, 166, 168 頁。
- (16) (17) アルツイバーシェフ著、馬場哲哉訳『作者の感想』121, 175・176 頁、人文會 1924 年。
- (18) 『魯迅全集第十一卷』『两地书四』20 頁。
- (20) (21) (22) (33) (35) 中井政喜『魯迅探索』183 注(4), 198~, 206~, 204, 204 頁、汲古書院 2006 年。
- (23) 野村邦近『魯迅とアルツイバーシェフ』298 頁~, 新田大作編『中国思想研究論集』雄山閣 1986 年。

- (24) (29) 昇曙夢『露國現代の思潮及文學』339～, 337 頁、新潮社 1915 年。
- (25) (26) (27) (28) 中島清訳『労働者セキリオフ』『解題』、1～5 頁, 1 頁 5～8 行, 1 頁 13 行～2 頁 3 行, 3 頁 15 行～4 頁 4 行、新潮社 1919 年。
- (31) (36) M. Artzibaschew『Revolutionsgeschichten』XIX頁, XII頁 autorisierte deutsche Uebersetzung von S. Bugow und Andre Villard, G. Müller 1909 年。
- (37) (39) (40) (41) 胡慶雲・高軍『无政府主义在中国』1・2, 135, 139, 135 頁、湖南人民出版社 1984 年。
- (38) 『日本思想史辞典』963 頁、山川出版社 2009 年。
- (42) (43) (44) (45) 『鲁迅全集第一卷』『文化偏至論』50, 52・53, 46, 57 頁。
- (46) 汪暉『汪暉自选集』133 頁、広西師範大学出版社 1997 年。
- (47) (73) 『鲁迅全集第一卷』『娜拉走后怎样』164, 160 頁。
- (48) 『鲁迅全集第一卷』『灯火漫笔』217 頁。
- (49) (79) 『鲁迅全集第三卷』『答有恒先生』454, 457 頁。
- (50) (51) (52) (53) (56) (62) (63) (69) (70) (74) (75) 『鲁迅全集第一卷』『文化偏至論』51, 51, 51, 51, 51, 46, 46, 46, 56, 57, 56 頁。
- (57) (59) (61) (68) ステルネル著、草間平作訳『唯一者とその所有 下巻』220, 263, 328, 298 頁、岩波文庫 1929 年。
- (58) (66) 『鲁迅全集第八卷』『破惡聲輪』26, 27 頁。
- (60) 『鲁迅全集第十卷』『“医生”译者附記』177 頁。
- (64) 『鲁迅全集第一卷』『摩羅詩力說』71 頁。
- (65) 震(何震)・申叔(劉師培)『論種族革命与无政府革命之得失』137・138 頁、『无政府主义在中国』湖南人民出版社 1984 年。
- (67) 『鲁迅全集第一卷』『三十三』301・302 頁。
- (72) プレカアノフ著、辻順訳『無政府主義と社会主義』29 頁、『世界大思想全集 29』春秋社 1928 年。
- (76) 『鲁迅全集第一卷』『写在《坟》后面』282 頁。
- (77) (81) (82) 『鲁迅全集第一卷』『文化偏至論』52, 57, 56 頁。
- (78) 『鲁迅全集第三卷』『記談話』357 頁。
- (80) 『鲁迅全集第十一卷』『兩地書八』31 頁。
- (83) 錢理群『话说周氏兄弟 北大演講录』19 頁、山東画報出版社 1999 年。